

「ぶれない図書館のために」

加東市中央図書館長 直井 勝

先日、大阪のY市のある図書館開館10周年記念誌が届いた。そこには、その図書館の歴史や活動を表す数表などは無く、市民の図書館を利用した感想や思いが満載されていた。

「雨の日は、やる事が無いから弟ときます。(中略) 図書かんに入っておじちゃんとお姉ちゃんが話しかけてくれます。そんなおじちゃんとお姉ちゃんが大好きです。」と小学3年生。「使い心地の良さと司書の方々の雰囲気が好き」というお嬢さんは、「本を探す時、それを手助けしてくれる司書さんがいるのが気分的にちょっと嬉しい」と言う。

掲載されている文章に共通することは、利用者の図書館要求が日常生活の延長線上にあるということと、図書館員とのかかわりに喜びを感じていることである。

また、資料提供という当たり前のことを職員間で十分話し合わせ、館の基本サービスとして大切にしている様子が行間からにじみ出てくる。図書館が、市民のさまざまな暮らしに役立ち、「開かれた図書館」「安心できる図書館」「頼れる図書館」「その気にさせてくれる図書館」になっているようだ。

今、図書館のあり方や図書館職員の専門性の問題が論議をよび、図書館業務の民間委託化や指定管理者制度導入への動きが図書館界を揺るがしている。

兵庫県図書館協会の調査によれば、平成18年6月現在、県下の指定管理者制度導入館が5自治体8館となっている。また、その後、導入を検討している自治体(図書館)も数館にのぼると聞く。一方、導入を検討してきたが撤回し、図書館は今まで通り直接管理運営するという自治体も出てきたようである。まさに混沌とした状況の中に兵庫県の図書館もあるようだ。

2005年8月24日、日本図書館協会は、「公立図書館の指定管理者制度」について当面する課題として、「検討にあたっての視点・基準」「現時点における指定管理者制度に対する評価」「指定管理者制度と図書館運営」について考え方を示した。この中で協会は、図書館事業の継続性、蓄積性、そして無料の原則などを考えると、指定管理者制度の導入は「公立図書館の目的達成に有効とは言えず、基本的にはなじまないものとする」としている。

ここで、自分の仕事として指定管理者制度導入を考えてみよう。

例えば、資料の収集、蔵書構成、資料提供、レファレンスなどの図書館の仕事は、そこに働く図書館職員集団が同じ使命感を持ち、安定的に、計画的に行うところから充実、発展するように思う。しかし、指定管理者制度の導入は、その性格上、これらについてじっくりと腰を据えて行うことが難しいのではないかと思うし、図書館職員の働く意欲、熱意までも失わせることに繋がらないかと心配もする。

私は「図書館は利用されて育つもの」と考えている。カウンターなどで「図書館があつて良かった」「探してもらってありがとう」という利用者の笑顔から「図書館で働く喜び」(使命感)を感じるのである。利用者を知り、資料に精通するとともに、使命感を持ち計画的に仕事をしたいものだと思っている。

また、経済的利益を期待する指定管理者制度導入は、無料の原則を持つ図書館の仕事にはなじまないだろうし、社会教育機関である図書館の自立性、独立性についての危惧を感じてしまうのは過剰反応なのだろうか。

その上、指定管理者制度導入の話は、図書館現場に最初から「導入ありき」という形で下ろされることが多いようだ。図書館行政は、あくまでも利用者本位でなければならない。一番利用者の要求を肌で感じている図書館職員集団が、自館の現状を把握し、図書館の将来像や目標を構築するとともに、指定管理者制度導入などの行政改革の動きを把握し、すばやく対応できるよう準備しておく必要があるようだ。利用者とともに、ぶれないために。

目・耳・心・手

今年、図書館員 1年生

淡路市立北淡図書館 榎田 京子（ひつだ きょうこ）

私が図書館で働き始めて、もうすぐ一年が過ぎようとしています。春の異動で、図書館勤務と決まった時、今までと全く違う環境だったので心配していました。

北淡図書館は、職員が館長と私の2人で、他の図書館に比べて規模は小さいもののすべて2人でおこなっているため、図書館業務の事もよく分かり、とても勉強になりました。

働き始めてすぐに地元の小学校から図書館見学の依頼があり、館長と大型絵本で読み聞かせをしました。大型絵本があるという事も読み聞かせという言葉も知らなかった私は、とても緊張しながら、間違えないようにと必死に読んだように思います。その後、研修会などで様々な方の読み聞かせを聞き、読み手と聞き手が一緒に楽しむのが「読み聞かせ」であるという事が分かり、もう少し私も楽しんで読んでみようという気持ちになりました。少し前にも図書館見学があり、少し余裕ができた私は、読んでいる途中で子どもたちの顔を見てみました。そうすると子どもたちの目は輝いて、いきいきとした顔で聞いてくれていました。その時、本の持つ力、素晴らしさなどを実感しました。

私は一年で図書館という職場から離れてしまっていますが、機会があれば、また勤めたいと思っていますし、読み聞かせなどもやっていきたいと思っています。また、将来自分の子どもが生まれたら、どんどん図書館を利用して、本をたくさん読んであげたいと思っています。

資料を大切に

福崎町立図書館 三井 皇子（みつい きみこ）

図書館が開館して、早いもので1年半が過ぎました。開館に備え、約35,000冊の資料を購入し、書架には比較的新しいものが並んでいます。新しい本を手にとる時はなんとなく嬉しい気分になりますが、古くなった本にもそれぞれ価値があり、また、よく読まれた本には歴史を感じます。

どこの図書館でも悩みの種だとは思いますが、どれだけ本を大切に扱っていてもページがはずれてしまったり、落書きなどが発見され、修理が必要な場合があります。傷んだ本を見ると、悲しくなると同時に、「よし！きれいに修理しよう！」という気持ちになります。

わが図書館では「図書館応援隊」という様々な活動をしてくださるボランティアの方々があり、その中の製本ボランティアの方と共に、定期的に本の修理をしています。製本に関する本や県立図書館での製本講習の内容を参考にしながら修理を行っていますが、やはり素人。講習の先生が簡単に修理しているのを目にしているだけでも、実際に扱ってみるとなかなか難しいものです。

図書館ではさまざまなサービスの提供が必要ですが、予算も削減されている今、1冊1冊の資料を大切に扱い、たくさんの方に気持ちよく資料を利用していただけよう努力したいと思っています。そのためにも、研修にすすんで参加して技術を学び、ボランティアの方と協力して、早く腕が上達するように頑張りたいと思っています。いずれは「傷んだ本を新品同様によみがえらせる」ことが現在の目標です。

最果ての図書館より

新温泉町立加藤文太郎記念図書館 重本ゆかり（しげもと ゆかり）

兵庫県の最北端にあるこの図書館も今年で開館12年目を迎えました。田舎の小さな町の図書館として、また「加藤文太郎」という全国の登山家から愛される先人の顕彰館としていろいろな悩みを抱えて試行錯誤の12年間でした。一昨年は図書館開館10周年、加藤文太郎生誕100年の記念行事を実施しました。そして昨年の町村合併で海の町と温泉の町が一つになり、町名も《浜坂町》から《新温泉町》に変わりました。サービス範囲も広がり、移動図書館車についても積雪時には運行不可能になるステーションや大歓迎して争って本を借りてくれる各小学校への巡回などいろんな利用の形が増え、これからのサービス計画を大きく模索する時期にきています。そんな中でも図書館に来ることを日課にしてくださっている高齢者の方や小学生の

時によく利用してくれた女の子がいつの間にかお母さんになり、小さな子どもを連れての来館など様々な利用者の方々と触れ合う毎日は、図書館が地域にあることの大切さや暮らしの中にさりげなく根付いていく樹木のように、おだやかに成長していくことの温かさを感じています。図書館がこの小さな町だからこそ重要であり、人々の暮らしにもっと寄り添っていけるように日々の図書館業務を大切にしていかなければと痛感しています。そして本に囲まれて暮らせる喜びと癒しを一番に受けているのは私自身だと実感する毎日です。

図書館員の仕事

たつの市立龍野図書館 綿谷 弘美 (わただに ひろみ)

今、公共図書館員がおかれた立場はかつてないほど厳しいものを感じられます。私自身、長く一つの図書館で働いてきて、社会状況にこんなに影響を受け、混乱させられたことはありません。

振り返ってみれば、図書館も様変わりしました。一冊一冊の本を手に取り表題紙、目次、奥付を見、時にはページを繰って、分類し鉛筆を握って目録を書いていた。貸出はブラウン式の手貸しです。今では、マウスを動かしキーボードを叩けば瞬時に業務が処理出来ます。

その一方で変わらないものもあります。一番多く貸し出される分野は、当然のことながら文学です。いつの時代も人間は人の話を聞いて、共に喜んだり悲しんだり、他の人の経験を自分自身が経験したことのように感じたりします。文学作品を読んで、自身の現実生活を越えた経験をすることによって、人は共感の幅を広げ深めることができ、まわりの人々と良い人間関係が結べ、幸せに暮らしていけるのでしょう。桑原武夫は著書『文学入門』の中で「文学にインタレストを抱くことによって得るものは(中略)人間についての知識の獲得がある」と述べています。

18年度、連続講座「シェイクスピア入門」(全3回)を開催したところ、予想を上回る受講申込みがありました。400年も前の文学作品に関心を持つ人が少なからずおられるということに励まされました。未来永劫変わらぬ図書館員の仕事として文学の楽しさを伝えていきたいと思っています。

平成18年度第1回研究集会報告

「図書館の社会的イメージ調査」

日付：平成18年10月12日 場所：姫路市立城内図書館 講師：佐藤毅彦(甲南女子大学教授)

今回のテーマは、図書館やそこで働く職員が社会からどのようなイメージを持たれているかについて著作物、テレビドラマなどの事例から探り、図書館を客観的に見つめ直すことである。

図書館職員のイメージ

- ・ロングスカート、中絶経験のあるちょっと世間離れしてる(「素顔のまま」)
- ・宝塚歌劇で月影瞳が演じたものに、メガネをかけて腕ぬきをした図書館員役がある。

図書館の自由、倫理綱領に関すること

- ・貸出方式(ニューアーク式と思われる)により、過去に誰がその本を読んだのかわかってしまい、そのことが重要なエピソードとなっている。また、今も図書館で同じ方式で貸出を行っているとされている。(「Love Letter」、「ビューティフルライフ」、「耳をすませば」など)
- ・図書館職員が利用者の記録を外部にみせる場面がある。(「法月綸太郎」)

図書館のイメージ

- ・スリッパに履き替えて入館する図書館。利用記録が残る貸出方式。相互貸借で所蔵館を探す際にネットを利用せずに、図書館リストと電話のみで対応。(「いま会いにゆきます」)
- ・閑散とした館内で、本にはさんだメッセージを読みあう。(「白夜行」)
- ・「ビューティフルライフ」の車椅子図書館員のヒロイン 制作の際に車椅子については取材したが、図書館は取材しなかったらしい。(北川悦吏子インタビュー記事)
- ・離婚して図書館司書の勉強をしている(TBS「夫婦」)、図書館司書をめざして合格(フジ「恋ノチ

カラ)、などのテレビドラマ。

図書館現場では、ブラウン方式以降、利用記録については残すことがないようになっている。(学校図書館では旧方式の場合もあるが、公共図書館では「自由に関する宣言」もある。)

また、図書館員についても一昔も二昔も前の時代の人のように描かれており、描き方も少し違和感がある。図書館司書が削減され、きわめて就職・採用が困難な状況にある仕事がドラマで不正確に取り扱われている。

これらの事例から、図書館の内部と外部で図書館に対して持っているイメージに隔たりがあることがわかる。このところ、OPAC や Web での予約が増え、自動貸出機を置く図書館もではじめており、「セルフサービス化」してきている。外部からは図書館職員は、いまだに貸出返却などの手続きをする人と写っており、図書館は勉強するところと思っている人も根強い。

このような点を明らかにしていき、どのように図書館の現状、図書館員の役割を正確に伝えていくかがこれからの図書館の行方を左右するともいえる。

(加古川市立中央図書館 小浦慎治)

平成 18 年度(第 92 回)全国図書館大会報告

平成 18 年 10 月 26 日(木)～27 日(金)の 2 日間、岡山市において全国図書館大会が開催されました。今回は「晴れの国岡山から未来へ向けて一広げよう図書館の可能性」をテーマとしての開催で、約 2300 名もの参加がありました。

1 日目は表彰式、塩見昇氏の基調報告、児童文学作家で岡山県美作市出身のあさのあつこ氏の記念講演がありました。あさの氏の講演はかなり早い時期に定員になってしまい、残念ながら聞くことができませんでした。私は夕刻の交流会からの参加だったのですが、はじめての参加で、あまりの参加者の多さと盛大さに圧倒されました。それでも、兵庫県下の図書館からの参加者をはじめ知った顔がちらほら。そのつながりで紹介いただいたたくさんの方々と親交を深めることができました。

2 日目は公共図書館、大学図書館、児童・青少年サービス、図書館の自由など 11 の分科会に分かれ、それぞれのテーマで討議を深めました。私が参加した第 1 分科会では、「図書館サービスのさらなる広がり―2006 年・岡山からの発信」をテーマに、公共図書館の今日的な課題と可能性について考えました。午前には「文字・活字振興法を施行あるものにするために」(大串夏身氏)、「多様化する図書館経営と今後」(西野一夫氏)、「図書館の危機管理」(中沢孝之氏)の基調報告がありました。午後は第 1 分科会「利用者の求めに応じた図書館サービス」、第 2 分科会「多様化する図書館運営の形態」、第 3 分科会「図書館の危機管理」に分かれての討議でした。

参加した第 2 分科会には公共図書館だけでなく、さまざまな立場の方の参加もあり、各地で指定管理者制度を請け負っている企業や、業務委託を請け負った NPO、直営を選んだ公共図書館それぞれの立場からの事例報告がなされました。公共図書館の業務委託や指定管理者制度の是非についての議論がありながらも、運営形態が大きく変わりつつある昨今、兵庫県下の状況を鑑みても他人事ではすまされない状況です。このようななかで、公共図書館以外の立場からのお話が聞けたことは、たいへん貴重なものでした。公共サービスとしての図書館のあり方をふまえ、よりよい図書館サービスはどのようにすれば提供できるのか、多くの方々とともに知恵を出し合って考えていかねばならないと感じました。

神戸市立図書館からは他に第 3 分科会に松永奉仕係長が参加し、「自然災害と図書館」というテーマで、今年で被災から 12 年になる阪神淡路大震災からの復旧についての報告を行いました。

(神戸市立兵庫図書館 阪本和子)

「新ひょうご図書館情報ネットワーク（新 HAL ネット）」発進！

－県立図書館の資料検索が快適に－

兵庫県立図書館資料課長 宮本 博

兵庫県立図書館のコンピュータネットワークシステムは、平成 11 年 9 月に運行を開始しました。これは、県内図書館の横断検索機能を備えた、当時としては全国的にも最先端のシステムでした。しかし、その後、社会や図書館を取り巻く IT 環境が予測以上に急速に進展したため、県立図書館としての機能を十分に維持し、発揮するための新たなシステム作りが緊急の課題として取り上げられるようになりました。

そして、平成 16 年に兵庫県立図書館システム検討委員会が設置され、そこでとりまとめられた報告書『兵庫県立図書館 新システムについて』を受けて、システム更新のための具体的な内容検討を進めてきました。

このような状況の中、システム運行開始より 7 年が経過した昨年（平成 18 年）、ようやく予算措置が整い、年末にコンピュータシステムを全面的に更新することができました。現在、まだ細部の作業中ですが、新年 1 月 5 日より新しいシステム環境下で、各種の情報を発信しています。

新システム（富士通 iLiswing21/UX+）は、これまで使用していたシステムを継承したものであるため、資料検索の画面イメージ等に大きな変更はありませんが、次の点が変わりました。

- ①資料検索の速度が向上（最大の課題が解消）
- ②ホームページのトップ画面をリニューアル
- ③新刊書の書誌データに「内容紹介」を追加（TRC マーク記載分）
- ④特定のテーマにより所蔵資料を紹介する「テーマ一覧」を開設（現在は、兵庫県旧五国についての「ふるさとの歴史を訪ねて」を掲載。以後、随時追加・更新予定）

また、来館利用の方より要望が多かったインターネット検索用のパソコンを 12 台設置しました。1 回の申込みにつき 1 時間という制限はありますが、多くの方にご利用いただいています。

今後は、インターネットでの「貸出予約申込」、「利用状況照会（予約・貸出状況）」、県立図書館が作成した「データベース（郷土資料雑誌記事索引等）の公開」など 4 月 1 日開始予定の新サービスや、「県内図書館総合目録（横断検索）」の充実・参加館拡大に向けての作業を行います。新 HAL ネットが本格軌道に乗り、県内図書館の皆様にとって、より使いやすいシステムになるまでには、もう少し時間が必要です。ご理解とご協力をお願いいたします。

平成 19 年度全国大会等のご案内

○第 93 回全国図書館大会東京大会

期 日：2007 年 10 月 29 日（月）～30 日（火）

会 場：日比谷公会堂、国立オリンピック記念青少年総合センター

テーマ：つなげよう未来へ、ひらこう現在（いま）を 図書館は力

－文化が集まる、情報が集まる、人が集まる

○平成 19 年度全国公共図書館研究集会

- | | | |
|----------|--------------------------------|-----------|
| ・サービス部門 | 期日：2007 年 11 月 15 日（木）～16 日（金） | 会場：沖縄県那覇市 |
| ・総合・経営部門 | 期日：2007 年 9 月 27 日（木）～28 日（金） | 会場：青森県青森市 |

お知らせ

日本図書館協会より平成 20 年度第 94 回全国図書館大会を兵庫県で開催するよう要請がありました。このことについて 1 月 23 日兵庫県図書館協会臨時理事会を開催し、主催団体として参画することになりました。会員みなさまのご支援ご協力をお願いします。